

一種の集団として扱つておるので、はつきりした事はいわれないが、♀♀の生存期間は、一週間位と思ふ。(鈴木実)

Sagitta crassa に於ける 2-type の中間型とその分布について

弘田 礼一郎 (広大・理・臨海)

S. crassa の中間型については昨年も発表したのが、1954 年 12 月より 1955 年 2 月迄の間、向島近海の 20 Station に於て多数の個体が採集されたので、種々の程度の中間型についての形態及び分布を調べる事が出来た。

大型種 (*S. crassa*) 及び小型種 (*S. c. f. naikaiensis*) を区別する特徴のうち胞状組織と繊毛環の発達程度によつて中間型は 10 の型に区別される。繊毛環は中間型に於ては非常に変異が多く体長乃至は成熟の度合に対しそれ程重要な意味がない様であるが、胞状組織の発達は略体長に比例している様であり、15mm 以上の個体では胞状組織の完全な発達が見られる。

これらの中間型は水温の高い 12 月には見られず小型種のみが豊富に認められるが、1 月に入ると早く水温の下る内湾の地域で発達程度の低い中間型の出現があり、小型種と認められるものは殆んど発見されない。2 月には全海域の水温の低下に伴い大型種を含む中間型が多数見られる様になる。

これらの点から *S. crassa* に於ては、大型種の出現が水温の降下と外洋水の存在に於て中間型の段階を経て行われるものと考えられる。

問 (1) 属 *Sagitta* には何種類知られて居るか。(2) *Sagitta crassa* には幾つの formae が知られて居るか。(鈴木実)

答 (1) 向島近海では *S. crassa* 及び *S. euflata* の二種が報告されている。(2) *f. naikaiensis* のみ。

有明海におけるタチウオの生態について

塚原 博・塩川 司 (九大・理・天草臨海)

タチウオはトロール及び底曳漁業の重要魚種であるため、外海の資源の生態学的研究はなされているが、内海及び沿岸の資源の生態は明らかにされていない。私らは有明海内のタチウオについて、回遊・産卵・初期生活史・昼夜の垂直移動、漁獲資源の季節的消長及び経年変動を明らかにした。卵の人工受精及び天然採集によつて、産卵は 6~11 月に亘り内湾で行われることを確かめ、稚魚の採集とともにその初期生活史を明らかにした。有明海の釣漁場での漁獲の季節的消長は顕著で、6 月及び 11 月に好漁の山があるが、これは産卵及び越冬前の強い索餌に原因し、外海資源の消長と比較検討して、有明海のタチウオは東支那海のものと同一種族と推定した。経年変動からは資源の増減は認められない、又タチウオは夜間底層にあり、昼間中層に浮いて索餌することを魚群探知機により明らかにした。

日本海におけるオットセイの廻遊 犬飼 哲夫 (北大・農・動)

この動物の夏の蕃殖地は Pribilof, Commander, 海豹島であるが、日本海に入るのは海豹島のものである。吾太平洋岸には冬期に前二者のものが来るが、津軽海峡を往来する事実がない故に、日本海には宗谷海峡を通るものだけで、海豹島のものであることは確かである。

オットセイが海豹島を離れるのは 11~12 月で冬期には日本沿岸には見えないから沿海洲側を南下すると思われる。内田恵太郎教授の報告では朝鮮でスケトウダラの網に入るとのことで、ウツリヨウ島から更に 35°N まで南下し早春に能登半島沖から吾沿岸に接近し、早春には青森県沖の九六島附近で見られる。北海道江差附近に 6 月上旬に漂着したものもある。これより北上して宗谷海峡に入るが、別にオホツク海側で、知床半島に漂着したものもあり、海豹島からは太平洋に入るものもあることが確かであるがその比率は不明である。